NPO法人 伊達メセナ協会
会員通信

第３号
平成 28 年 12 月 10 日発行

◎発行◎
ＮＰＯ法人
伊達メセナ協会
伊達市松ヶ枝町 34 番地 1
☎0142-22-1515

発行責任者
太田和実

文化施設 訪問記 =1=

胆振には数々の文化施設があり、それぞれが特色ある活動を展開しています。具体的にどういった運営をしているのか？実際に訪れ、その方法を探ることにより、当協会活動にとってプラスとなることを期待し、新企画を新設しました。第１回は洞爺湖町の「洞爺湖芸術館」です。

洞爺湖芸術館を訪ねて…
手のひらに広がる宇宙を体感
洞爺湖の景観が繋ぐ芸術の灯

ミシッ・ミシッ。板張りの階段や廊下は歩くたびに軋み音を発し、小気味よいリズムを刻んでいる。木造建築に慣れ親しんだ日本人にとっては、どこか懐かしく落ち着きを感じる響きがある。建築年を尋ねることを躊躇（ためら）うほどの歴史を感じる洞爺湖芸術館は、平成の大合併で虻田町とともに洞爺湖町となった旧・洞爺村の庁舎を再活用した美術館、その存在感は北の大地を開拓し、新たな文化圏創造の大志を掲げた先人の強い想いが詰まり、美術館として第二の使命を担うに相応しい歴史観がある。

１９９３年にスタートした「洞爺村国際彫刻ビエンナーレ」は、小型彫刻の公募展として話題になり、「手のひらの宇宙」のテーマが新鮮な印象を与えた。この公募展に世界から応募された作品の展示室は、若手彫刻家の登竜門と言われた同ビエンナーレらしく、既成概念に囚われない発想が並び、まさに手のひらに広がる宇宙を体感できる展示となっている。ビエンナーレは２００７年から休止中、同館10周年となる２０１８年の復活を目指している。

本道出身の彫刻家・砂澤ビッキアトリエ展示室は、順路最後の展示となる。荒々しい中にも繊細さが感じられる大型木彫展示のため、旧庁舎の床を下げ、天井を高くする工事が行われている。ノミなど彫刻制作の工具も展示、ビッキのアトリエを再現する。絵画でも非凡な才能を発揮したビッキ、その作品も数点展示され、独特の感性を放っている。

世界的写真家として知られる並河萬里（故人）が、洞爺湖を撮影した作品を鑑賞できる展示室もある。数点の撮影依頼に対し、洞爺湖に暮らすこと３年を費やし、自然との対話から生まれた作品群は、時間を切り取るはずの写真に、連続する時の息吹を与え、穏やかな響きが沁み、観る者の想いも反響させる宗教的で不思議な力を放つ。氏の撮影に対する真摯な取り組みが伺える。

谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫など我が国を代表する文豪の作品を収集した近・現代文学初版・限定本コレクションも展示する。これは横浜市の石島成美氏の個人コレクションを、同氏が寄贈したもの。非常に貴重な文学資料といえる。芸術館は以上四つのゾーンで構成されている。

洞爺湖芸術館全景（来年３月まで冬季休館中）

際立つ企画展 コンサートも実施

芸術館は常設展も魅力ではあるが、多彩な企画展やコンサートなどにも積極的に取り組んでおり、この活発な活動が注目され、詳しい話を学芸員でもある三島邦代館長に伺った。

企画展は平成28年度実績で特別企画展４回、コンサート２回、町民ギャラリー３回、特別展２回、ワークショップなどイベント９回、合わせて20回という驚異的な回数を消化、地域住民はじめ近隣の芸術文化愛好者に鑑賞機会を提供し、同様に子どもたちに豊かな夢を与えてきた。この活動は特筆に値し、高く評価されるべきである。

一連の企画と芸術館の指定管理を担うのが同館の「友の会」であり、現在会員は家族会員を含め66人。内役員は監査役を含め７人で構成され、企画内容の計画は３、４人の主要メンバーで立案する。さらに「これはどうだろう企画会」も必要に応じ開き、意見を吸い上げる体制はあるが、ほとんどが主要メンバーの発案によるものという。

この決定プロセスが特徴でもあり、豊かで実りある実績をけん引する動力と感じた。「みんなで決める」と言えば、確かに聞こえはいいが、実際は必要以上に時間がかかり、無駄が多くなるのが常だ。シンプルな組織の方がスピード感があり効率的になるのだ―、と感じる。

企画展実施予算は、特に無いというから驚く。指定管理の中に「企画費」の予算はあるが、十分ではない。例えばコンサートの出演ギャラは、チケットの売り上げに応じ交渉したり、まるで「家計のやりくり」のように地道な努力により賄っている。当然企画段階で断念することもあるが、出演者の協力により実現することもあり、チケット販売まで引き受けてくれた例もあるという。

もう一つ、この芸術館には特別なネットワークがあると強く感じた。それは洞爺村時代から培った「人との繋がり」と、洞爺湖を中心にした「自然環境・景観との繋がり」だ。展示物を寄贈した石島氏、彫刻家・砂澤ビッキ氏は、ビエンナーレが繋いだ縁。世界的写真家・並河萬里氏との縁は、洞爺湖の自然景観が繋いだ。また、この景観に惹かれ移住してきた人々のネットワークまでもが、芸術館と繋がり、第一線で活躍する演奏家のコンサートが実現したりしている。文化は風土が創る―、を目の当たりにした取材だった。

（文・写真　小川満）

四季折々の景観を見せる洞爺湖畔

心の栄養となる舞台芸術の鑑賞
8人の市議が新たな会員に

尾上　明美

11月21日、伊達メセナ協会主催の「挽歌」という作品の舞台を観劇しました。安田成美さん、高橋長英さんなど６名の俳優さんの出演でした。

ストーリーは東日本大震災から５年、戻りたくても戻れない故郷、見通しの立たない「原発」への複雑な思いをかかえながらも、原発避難者の心を短歌を通してつながりあって復興への長い道のりを、覚悟しながら必死に立ち上がり、前を向いて力強く歩き出す人々の物語でした。

私は震災後２度、被災地を訪れたことがあり、その時に目に焼き付いた風景、立ち寄ったいろいろな場所で触れ合った人々の、懸命に生きている姿を思い出しながら見ていました。

奇しくも舞台の翌日の22日に福島沖で震度５の地震が起き、また津波の恐怖にさらされたのです。５年前の大災害に至らなかったことが不幸中の幸いでした。

心の栄養となる、色んなジャンルの生の舞台は、人としての成長を育んでいくのに絶対必要なものであり、自分の生き方を考えさせてくれます。

今年２月、伊達市議会の総務文教常任委員の皆様との意見交換会に出席する機会をいただきました。議員さんの話を伺っていて、メセナ協会のことをもっと知って欲しいと強く感じました。会員として入会頂いている方も、６名の議員さんだけでした。メセナ会員は伊達の文化を市民みんなで盛り上げていこうという心意気で頑張っているのですから、伊達市のことを一番に考えてくれている議員の皆さんに、率先して会員になっていただきたいと思いました。

しかし、その後８月末に加入協力をお願いしたところ、新たに８名の議員さんのご入会をいただき、大変意義深いものがありました。

このことは、伊達メセナ協会が更なる発展をするための大きな１歩になるものと思いますし、そうなるよう努力する所存でございます。

特集

ホール運営を考える

残響とは…厄介な特性とは？

カルチャーセンター大ホール

世界的指揮者・小澤征爾が札響を指導に訪れた際、バイオリン奏者の楽器をいきなり取り上げ「これは楽器ではない！楽器と呼べるバイオリンは５００万以上のもの」と言い放ったそうです。数十年も前のことなので現在の水準では1千万以上になるのでしょうか？

札響は市民オーケストラとして１９６１年に発足、翌年財団法人化してプロの基盤を築いてきました。当初の団員は地元の大学生も多く、プロと呼ぶにはまだまだ貧弱な状態で、小澤が言う高価な楽器など持っている筈がありません。

数十年後、中国のオーケストラを指導した小澤が、同様のことを言いました。それも指導と受け止めた中国政府は国の威信をかけ、短期間で名だたるマイスターの楽器をそろえたといいます。

札響の話は若い頃、団員から酒の席で聞いたことなので真実は定かではありませんが、中国のことはＮＨＫ(民放かも?)のドキュメンタリー番組でも放映されていたので間違いありません。嫌悪感を持つ人も少なくない話しの内容は、決して極論ではなく真剣に音楽と対峙してきた小澤にすれば当然で、良い音楽をつくるためには自然な要求であった―と理解します。

一流の演奏家の違いは単純に音圧、音量の絶対的な完成度で細かな表現力や技術ではありません。それは天性の才能であったりするから、それを支える楽器の優劣は非常に大切なものである、と言うことでしょうか。

さて、では第2の楽器と言われるホールについてはどうなのか?カルチャーセンター大ホールについても考えてみます。

ホールは大きく分類すると「専用ホール」と「多目的ホール」になります。専用ホールとはコンサートホールのように、利用目的に特化したもので、そのこだわりが強く、建設費も当然高くなります。もう一方の多目的は音楽や演劇、時には講演など文字通り多目的に利用可能なホールで、一見便利に思えますが広範な目的に応じるため、物足りなさは拭えません。

コンサートホールの場合、決定的に違うのは響き方で、楽器が音を発して止めてから残る響き、つまり「残響」に対し徹底的にこだわることです。それを表す単位は「秒」であり、その数値2秒が究極の残響と言われており、世界の有名ホールはほぼ全てが2秒の残響を有しています。

多目的ホールは一般的に1秒から1・5秒程度に抑えられています。理由は2秒の残響だと人間の話し声が響きすぎ、聞き取りにくくなるため講演などには当然適さなくなるからです。カルチャーセンターも多目的ホールであることから、大ホールの残響はこの範囲内に留まると思われますが、多目的には響きの良いホールと言われています。

実はカルチャーセンター開館前に、某大学が実習目的で大ホールの残響測定を実施しています。当然測定結果を知らされており、当時の市教委担当者から測定した数値を公開したほうが良いか尋ねられたことがありますが、その測定結果はあり得ない数値であったため、即座に「面倒なことになるから公表しない方がいい」と答えました。恐らくは単純な測定ミスか、機器の不具合から測定音以外の雑音も集音した結果でしょう。残響とは本当に厄介なものです。

多目的の欠点を補う「残響可変装置」なるものも考案され、隣りマチの室蘭市民会館が設置しています。現代技術の粋を結集したハイテク機器かと思いますが、客席側面の一部に厚手の布をカーテンのように広げる簡単な原理です。繊維が音を吸収する性質を利用したもので、いかに残響が微妙で厄介なものであるかが理解できるでしょう。

ここで大きな疑問が生じます。聴衆の衣服が残響に影響するのではないか?答えは「する」。その影響を極力抑えるため、欧米ではコンサートホールは社交場で正装が常識とされているのです。コートなどはクロークに預け、ホール内には持ち込みません。カルチャーセンターにもクロークは設備されていますが、これまでこの目的で活用されたことはないと記憶します。

言い訳をさせてもらえば、残響にこだわるコンサートの頻度が低いこと、クロークを稼働させる人員確保とノウハウの問題、入場者が1カ所のクロークに集中する危険性、我が国のレベルがそこまで至っていない云々、解決すべき問題が山積する現状があるのです。今後オーケストラ公演など、限定的対応を検討するべきとは思います。

このようにホール運営に関しては結構細かく、難しい面が多々あります。それを解決していくには正しい知識・認識と経験が重要になってきますが巨匠・小澤征爾のように誤解を恐れず主張することが重要と思います。「批判はどんな時代もあり、無知で無責任なもの」とその巨匠が語っています。欧米ではホール運営の組織トップを支配人と呼び、利用客第一のサービス主義が伝統的にあることの証しと言えます。残響については限られた特集紙面で説明するのは無理で、機会があれば追々掲載したいと考えます。（小川）

これからの伊達メセナ協会について

木村耕志

メセナとはフランス語で芸術文化の支援・擁護という意味の言葉です。多くのメセナは大きな企業が資金を提供して芸術文化を支援しています。伊達メセナ協会は一つの企業が行っているのではなく、多くの企業・市民・自治体などが協力しながら地域の文化活動を支援する活動形態をとっています。平成6年の設立以来、音楽・演劇・展示の3部会で多くの自主事業やイベントを行い、地域に根差した芸術文化の振興に努めてきました。22年間のメセナ活動の成果は小さくないと思いますが、これからの課題もたくさんあります。

私の所属する展示部会では、昨年度は道展伊達移動展、今年度は北海道書道展伊達移動展を主催事業として行いました。西胆振の作家作品も含め良い作品を多くの人に見てもらえる機会になったと思いますが、書や絵画などの作品はわかりにくいものも多いです。個人的な意見としては、より分かりやすい解説パネルの設置、Ｗｉ―Ｆｉを使った音声ガイドやポッドキャストなど、芸術文化を理解しやすいように展示することもこれからの課題になると思います。費用や設備面の問題もありますが良いものに触れる機会を提供するだけではなく、理解を深めてもらうための努力も必要なのではないかと感じています。

また、メセナ協会自体の広報活動として昨年度にホームページの刷新やフェイスブックの開設を行っていますが、これらの連携をより強めて情報発信を行うことが地域の芸術文化を広め、推進することにつながっていくと思います。

運営委員の一員として、今後も少しでもメセナ協会の力になれるように活動したいと思っています。

事務局だより

28年度視察研修旅行無事終わる

10月26日道立近代美術館で「ゴジラ展」を鑑賞

編集後記でも紹介しておりますが、28年度の会員視察研修旅行が去る10月26日、展示部会の担当により催行されました。参加は27人でした。

当日は市役所前を出発し中山峠経由で札幌へ向かい、もいわ山を見学しサッポロファクトリーで昼食、ショッピングを楽しんだ後、研修先の北海道立近代美術館へ。今回はＴＶなどでも取り上げられ話題になっていた「ゴジラ展」を鑑賞しました。

特撮による同シリーズは国民的な人気映画として定着、ハリウッドでもリメイクされるなど、国際的にも注目されてきました。

ゴジラのテーマ曲は本道釧路市出身の伊福部昭氏作曲で、音更村で育った氏は本道のアイヌ文化に高い関心を持ち、影響された作品も数多く発表されております。テーマ曲冒頭の印象的な曲想も、どことなく影響が感じられ、ゴジラは伊福部氏との関係から、本道と深いつながりがある映画作品といえます。

約2時間に及んだ鑑賞は貴重な記録なども見ることができ、意義深い時間となりました。終了後はキリンビール園でジンギスカンとビールを楽しみ、会員交流を深めました。

編集後記

■伊達はメセナ協会でいろんな作品をやってくれるからいいね。と、よその町の人は言います。私もそう思います。でも担当者はチケットの売れ行きが悪いと頑張らなくてはならず、結構なストレスです。（あ）

■　10月16日に札幌での視察研修が行われました。27名が参加した今回の研修は藻岩山から紅葉を眺めて札幌ファクトリーで昼食をとり、北海道立近代美術館の「ゴジラ展」を鑑賞しました。スタジオやセットの図面やスケッチなど、普段は目にすることのない資料を見ることができて大変良かったです。帰りはキリンビール園で懇親会を行いました。充実した視察研修になり、このような会員相互の親睦を深める機会がもっとあっても良いと思いました。（木）

■東京都の小池劇場が騒がしい。築地に始まった第一幕が終わらないうちに、舞台は2幕のオリンピック問題に、目まぐるしく舞台が展開している。主人公はドンと呼ばれる面々で実体はハッキリしない。当初のロゴ問題といい、国立競技場のドタバタ劇といい、客席からは「盛り土はどうした！」と弥次が飛ぶ。二転三転しているうちに舞台は3幕の「伏魔殿」のセットに早変わりしそうな気配、一体何が出てくるのかお楽しみと言わんばかり。それでも２０２０年は確実にやって来ます、早い幕引きを願うばかりです。そのためにも何だか姿の見えない議会が強いリーダーシップを発揮し、ハッピーエンドにしてほしいワ。情報のネット化で、傍観者的になった社会の縮図？伊達も気を付けましょう。（小）